万国津々浦々

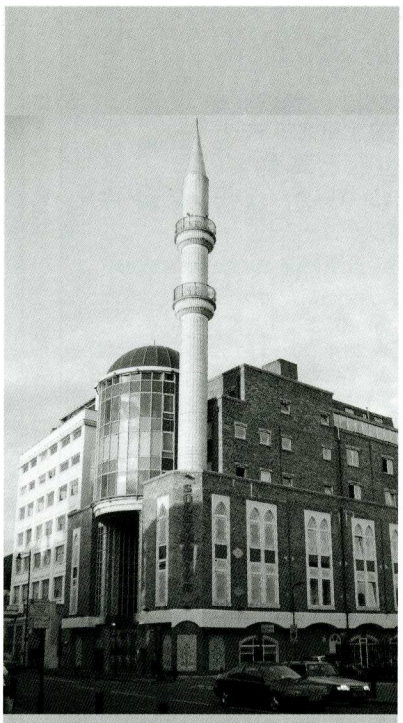
ロンドンで生き抜くトルコ人移民

宮澤 栄司
（みやざわ えいじ）
上智大学アジア文化研究所客員研究員

ロンドンへ亡命

ロンドン北部に位置するハックニー区は、ジャマイカ人やパキスタン人など移民が多く、英国でもっとも貧しい地区として知られている。地下鉄駅がなく不便だが、家賃の安さが魅力で、わたしはここに四年間住んだ。冬のある日、その街角に赤い車が停まった。降りてきた若者はアリだった。アリとわたしは以前トルコで自動車の教習所に通った仲である。五年ぶりの突然の再会を喜び合った。それからは、家の近くに彼が経営するバクラワ（トルコの甘いパイ菓子）屋に通うようになった。

アリはトルコ出身のクルド人で、アレヴィーである。アレヴィーというのは、トルコの少数派ムスリムのことだ。モスクで礼拝しない、ラマダン月に断食しないなどの理由から、多数派であるスンニ派ムスリムから長く迫害されてきた。身を守るために自分の信仰を隠すタキーヤとよばれる態度が身に付いたといわれている。



スンニ派トルコ人が所有するモスクのひとつ。3,000人を収容する

中央アナトリアにあるアリの故郷では、英国への移住が相次ぎ、村々が閑散としてしまったという。渡航の理由は、政治的弾圧や貧困、職探しなどである。アリも渡英して難民となった。偽装パスポートを入手し、中東やヨーロッパを九ヵ月も旅した後、ようやく英国に到着した。そのパスポートはヒースロー空港に向かう旅客機のトイレのなかで始末した。二五歳のときだった。

ロンドンでは、五年先に亡命していた兄と懸命に働いた。友人や親戚には移民協会の活動や政治にかかわる者も多い。だが、アリは商売に専念することにした。英語を学ぶ時間もなかったほどだ。その努力の結晶として、ロンドン北部に家と店を買った。そして、キプロス島で働いていた、もう一人の兄も呼び寄せることができた。

断食にパイを売る

アリ兄弟にとって、こうした成功はトルコから来た移民のコミュニティーあってのものだ。ハックニーだけでも三万人のトルコ出身者が住んでいる。アレヴィーやクルド人を目の敵にする右寄りトルコ人の店舗が並ぶバス通りに、二人の店もある。店でバクラワを作っているのは、スンニ派トルコ人の職人だ。アリや兄も菓子を焼くけれども、彼のバクラワには適わない。アリはもっぱら配達係だ。ロンドンの外にも毎週二度は出かけている。店の奥にあるオーブンの前では、いつもトルコ国内の政治が話題となるが、誰もが歩み寄りを心がけて話している。トルコからの移住者は、みな大切なお客様なのだ。民族や宗派を気にしてはいられない。

店の近くにはスンニ派トルコ人が運営する大きなモスクも建っている。ここのイマーム（礼拝の導師）は、以前アレヴィーの葬儀の執りおこないを断ったことで、アレヴィーのあいだでは嫌われている。アリはモスクに行かず、断食もしないが、毎年ラマダン月には、このモスクの前に立ってバクラワを売る。これをアレヴィーのタキーヤといおうか？断食が明ける日没後の食事には、甘いデザートが欠かせない。ラマダン月は、アリにとって一番の書き入れどきなのだ。ここには、競争の激しい移民社会をしぶとく生き抜く術がある。